

井上毅選『詩話抄』

木 野 主 計

一 『詩話抄』の解題

井上毅は文久元年（一八六一）に中国の宋時代の文人の詩話を編集して、これに『詩話抄』と言う書名を与えて一本を編纂している。この『詩話抄』は国学院大学図書館所蔵の「梧陰文庫」に所収している井上毅自筆稿本のD類2番—4の『骨董簿』中に載録されている。今回、『国学院大学図書館紀要』の第二号が上梓される機会を選んで、この『詩話抄』を翻刻する次第である。

次に、『詩話抄』に就いて簡単な解説を加えてみよう。『骨董簿』は井上毅が肥後熊本細川藩家老長岡監物は容の推薦で、熊本柳川丁に藩費自習館訓導木下犀潭の開校していた韓村書屋に入門した時の彼の勉強ノートである。木下塾に井上毅が入門したのは、安政四年（一八五七）七月四日で彼の十五歳の時であった。井上毅の英才ぶりを認めた長岡家では「読書拔群相進ミ候ニ付、為「修業」毎歳御心附米二俵宛被「下置」、学問ヲ主ニ致シ向後弥以相励可「申」と彼の学業を奨励したのである。彼の『骨董簿』はこの年即ち万延元年十月より筆録し初めたのである。『燈下録』も『骨董簿』も井上毅の木下塾での勉強ノートであるが、前者は書名からも推定されるように主として木下塾での師匠木下犀潭の講義ノートとそれに関係した彼の自習の勉強の帳面が中心で、後者はこれも書名で分かるように井上毅が学問修業上で必要とした色々な知識のアルマナックを彼自身で編纂したノート

である。

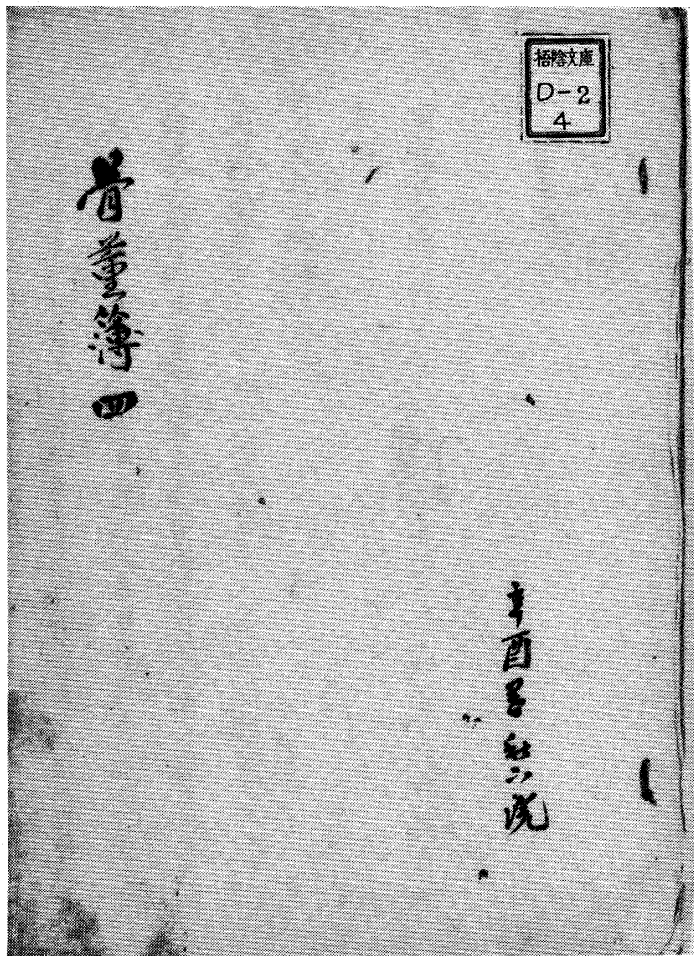
今、試みに『骨董簿』の中から井上毅が筆記したヨーロッパの新しい知識の覚書を次に記録してみよう。この様に、木下塾で経学ばかりを彼は勉強していたわけではないのである。

文久二年（一八六二）前八月に編の成った『骨董簿』五の巻頭に井上は西欧の窮理学の内容について次の如く記述している。即ち、

西人所謂窮理者有 一為^{セイミ}化學、言^ミ物各有^レ質、自能變化、精識之士條、分^ミ縷析^ミ知^ミ六十四元、此物未成之質也、一為^{ゲオロギイ}察地之學、地中泥沙與石、各有^レ層^ミ累^ミ積^ミ無^ミ數、年歲而成^レ細、為^レ推^ミ究皆分^ミ先後、人類未生之際、鴻濛甫闢之時、觀^レ此朗如^ミ明鑑、此物已成之質也、一為^{ソロギイボクニカ}鳥獸草木之學、舉^ミ一骨^ミ即能區別、其類知^ミ列國氣候之不同、一為^{アストロノミイ}測天之學、地球一行星耳與他行星同遠、地球者為^ミ定星、定星之外、則有^ミ星氣、中國古時有^ミ天元、求^ミ一諸法、今泰西代数最深者為^ミ微分法、以^レ之推^ミ算天文、無^ミ一不^ミ觸處、洞然矣、一為^{エレキテリシテイ}電氣之學、天地人物之中、其氣之精密流動者曰^ミ電氣、發則為^ミ電藏、則隱含^ミ万物之内、昔人畏避^レ之、以^レ其能^ミ殺人^ミ也、今則聚為^ミ妙用、以代^ミ郵傳、頃刻可^ミ通^ミ數百萬里、別有^ミ重學^ミ流質數端、と筆記し、ルビは井上の自筆である。之等の知識の出典は木下塾で日夜親しんだ長崎より舶来の新しい漢籍であった。日本では従来よりあまり親しまれることのなかった宋時代の詩を選んで梧陰井上毅が本書『詩話抄』を編纂したと言うことは、彼の勉学の範囲の広さを如実に物語っている証左である。しかもそれが十九歳という若さである。

二 『詩話抄』の内容と構成

『詩話抄』は井上毅が十九歳の文久元年（一八六一）暮秋の下浣即ち九月三十日に筆録した『骨董簿』四の中に収載されている。彼は慶応二年（一八六六）二月に長岡家の家臣井上茂三郎の養子となり飯田毅から井上毅となった。従って、『詩話抄』を編集した時には未だ飯田毅であったのである。『詩話抄』の内容は中国の宋時代の文人達の所謂漢詩に関する詩話を編集して一



本と成した物である。而して『詩話抄』の構成は次の如く五部より成立している。

- | | | |
|---|-------|-----------------|
| 一 | 六一詩話 | 歐陽修 (一〇〇七—一〇七二) |
| 二 | 溫公詩話 | 司馬光 (一〇一八—一〇八六) |
| 三 | 中山詩話 | 劉攽 (一〇二二—一〇八八) |
| 四 | 放翁詩話 | 陸遊 (一一二五—一二一〇) |
| 五 | 浩然齋雅談 | 周密 (一二三二—一二九八) |

井上毅は本書に『詩話抄』と言う書名を与える以前に「詩窓謾抄」と言う書名を考慮していたようである。それは本書の表題

『詩話抄』の下に「詩窓謾抄」の書名が読み取れるからである。

扱、それでは次に『詩話抄』を構成している中国宋代の五人の文人達の履歴とその内容に就いて簡単に触れることにしよう。

一 欧陽修の「六一詩話」は宋の詩人梅堯臣が欧陽修に語った詩体・詩句・詩家等の話や楊億の所謂『西崑體』に就いて、又、韓退之の筆力等に関しての詩話を抄録したものである。抑々、欧陽修は「韓范欧富」と称される様に、韓琦・范仲淹・富弼と共に北宋時代の名臣で、中国散文の大家として名があり、詩賦は李白に似ていると謂われ、晩年は自ら醉翁と号した。六一居士と称したのは、集古録一千卷、書一萬卷、琴一張、棋一局、酒一壺、鶴

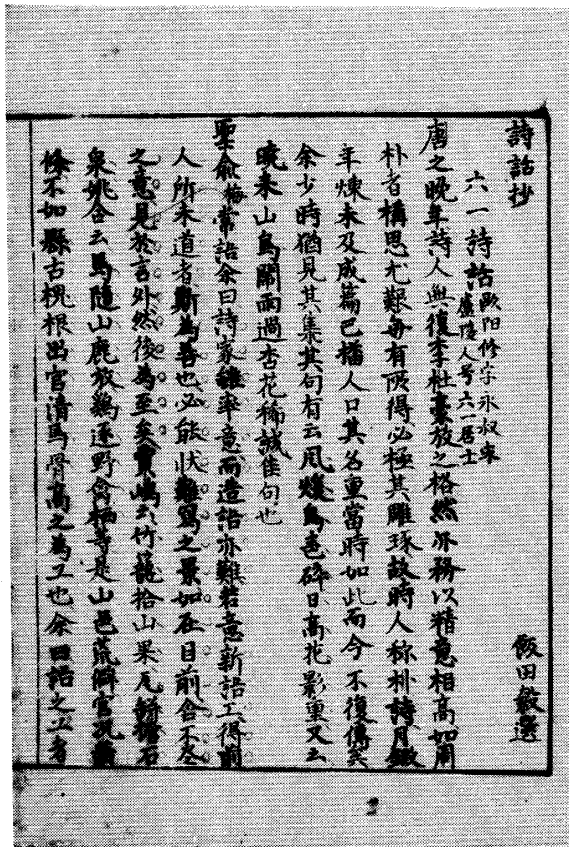
一雙の謂われより生じた。著書には『新唐書』『新五代史』『毛詩本義』『帰田録』『文忠集』『六一詩話』等がある。

二 司馬光の「温公詩話」は林和靖の梅花詩より「疎影横斜水清浅 暗香浮动月黄昏」を引用し、魏野の五言律詩を抄出、又、熙寧中・陳文惠等の詩話を収録している。司馬光は中国の散文家で、宋の天禧二年（一〇一八）陝州の夏県に生まれ、元祐元年（一〇八六）に没した。『資治通鑑』の著者として良く知られ、別に『目錄考異』『独樂園集』等の著書がある。

三 劉攽の「中山詩話」は蘇舜欽の七言絶句の詠風・文詞に就いて、又、唐詩の韵の有用に関する詩話、管子の唐詩の力量等に就いての話を載せている。劉攽は字は貢父。臨江新喻（江西省新余県）に乾興元年（一〇二二）生をうけ、元祐三年（一〇八八）六七歳で没した。著書には『彭城集』四〇巻が有り、『資治通鑑』の漢史の部分を担当した。劉攽は司馬光と共に王安石が新法を議した時、これに注文を付けて左遷された。

四 陸遊の「放翁詩話」は彼の詩集『劔南詩稿』よりの引用した詩句、柳子厚、張文潜・劉長卿等の詩文。又、東坡、白樂天等の詩の無窮に関する事共が収載されている。陸遊は中国の詩人で、宋徽宗帝の宣和七年（一一二五）越州山陰（浙江省紹興県）に生まれ、嘉定二年（一二二〇）八五歳で郷里に於いて死去した。著書には『劔南詩稿』『入蜀記』『南唐書』『天彭牡丹譜』『老学菴筆記』『渭南文集』『放翁詞』等がある。彼が放翁と号したのは、宋時代の詩人として名のあつた范成大に依つて官についたが、詩友として上下の無い交わりを結び、又、粗放な振る舞いが人の批判を招いたのであるが、彼は放翁と名乗つて、それに答えたからである。

五 周密の「浩然齋雅談」は天衣無縫・妙合自然の詩の話、非唐詩人で草木の詩語を良くしえたのは蘇軾東坡居士であるとか、陸遊の詩が天下無事の心を歌っているなどと語っている。又、放翁の詩には理があるとも言っている。周密は南宋の詩人一二二家中でその歌詞は絶妙好詞であると謂われ、王沂孫・張炎とともに宋末元初の詩風を良く伝えている詩人として有名である。周密は湖州吳興（浙江省吳興県）に宋末の正大五年（一二三二）に生まれ、元の成宗大徳二年（一二九八）に杭州で宋の滅亡後は官に就かず遺民として節を全うして没した。詩集には『草窗韵語』『蠟屐集』『弁陽集』がある。南宋の旧事を記録した『齊東野語』が、又、宋元の迭聞集『癸辛雜識』があり、共にその史料的价值は高く評価されている。



三 『詩話抄』 翻刻の凡例

- 一 本書の底本は国学院大学図書館所蔵「梧陰文庫」D-12『骨董簿 四』に収載されている「飯田毅選 詩話抄」である。
- 二 本書の体裁は太罫紙様の楮紙十二枚（縦二十五センチ×横十八センチ）に十二行二四字詰で全文が井上毅自筆墨書である。
- 三 本書には井上毅の朱点を存するも、句読点のみを残して外は省略した。尚、句読点の無い場合は編者が適宜これを施した。
- 四 本書の翻刻に際しては、書体は底本の儘としたが、異体字は正字に改めた。
- 五 読者の便宜を考慮して、人名を表示するために本文の右方に傍線を以て、それを表記した。

詩話抄

飯田 毅 選

六一詩話 歐陽修字永叔宋廬陵人號六一居士

唐之晚年、詩人無復、李杜豪放之格、然亦務以精意相高、如周朴者、構思尤艱、每有所得、必極其雕琢、故時人稱朴、詩、月鍛年煉、未及成篇、已播人口、其名重當時如此、而今不復傳矣、余少時猶見其集、其句有云、風煖鳥聲碎、日高花影重、又云、曉來山鳥鬧、雨過杏花稀、誠佳句也。

聖俞^梅常語余曰、詩家雖率意、而造語亦難、若意新語工、得前人所未道者、斯爲善也、必能狀難寫之景、如在目前、含不盡之意、見於言外、然後爲至矣、賈嶋云、竹籠拾山果、瓦甌擔石泉、姚合云、馬隨山鹿放、鷄逐野禽栖等、是山邑荒僻、官況蕭條、不如縣古槐根出、官清馬骨高之爲工也、余曰、語之工者固如此、狀難寫之景、含不盡之意、何詩爲然、聖俞曰、作者得於心、覽者會以意、殆難指陳以言也、雖然亦可略道其髣髴、若巖維柳塘春水慢花塢夕陽遲、則天容時態、融和駘蕩、豈不如在目前乎、又若溫庭筠雞難聲茅店月、人迹板橋霜、賈嶋怪禽啼曠野、落日恐行人、則道路辛苦、羈旅愁思、豈不見於言外乎。

聖俞子美^蘇齊名於一時、而二家詩體特異、子美筆力豪雋、以超邁橫絕爲奇、聖俞覃思精微、以深遠閑淡爲意、各極其長、雖善論者、不能優劣也、余嘗於水谷夜行詩、略道一二、云、子美氣尤雄、萬竅号一噫、有時肆顛狂、醉墨灑滂霈、譬如千里馬、已發不可殺、盈前盡珠璣、一々難揀汰、梅翁事清切、石齒漱寒瀨、作詩三十年、視我猶後輩、文辭愈精新、心意雖老大、有如妖韶女、老自有餘態、近詩尤古硬、咀嚼苦難噉、又如食橄欖、眞味久愈在、蘇豪以氣轢、舉世徒驚駭、梅窮獨我知、古貨今難賣、語雖非工、謂粗得其髣髴、然不能優劣之也。

聖俞嘗云、詩句義理雖通、語涉淺俗而可笑者、亦其病也、如有贈漁父一聯云、眼前不見市朝事、耳畔惟聞風水聲、說者云、患肝腎風、又有詠詩者云、盡日覓不得、有時還自来、本謂詩之好句難得爾、而說者云、此是人家、失却猫兒、詩人皆以爲笑也。

詩人貧求好句、而理有不通亦語病也、如袖中、諫草朝天去、頭上宮花侍宴歸、誠爲佳句矣、但進諫必以章疏、無直用藁草之理_中

略如賈島哭僧云、寫留行道影、焚却坐禪身、時謂燒殺活和尚、此尤可笑也、若步隨青山影、坐學白塔骨又独行、潭庭影數息樹邊身、皆島詩、何精蘄頓異也。

楊大年與錢文僖劉子儀數公唱和、自西崑集出、時人爭倣之、詩體一變、而先生老輩、患其多用古事、至於語僻難曉、殊不知自是學者之弊、如子儀新蟬云、風來玉宇鳥先轉、露下金莖鶴未知、雖用古事、何害爲佳句也、又如峭帆橫渡官橋柳、疊鼓驚飛海岸鷗、其不用故事、又豈不佳乎、蓋其雄才博學、筆力有餘、故無施而不可、非如前世号詩人者、區々於風雲草木之類、爲許洞所困者也。

西洛故都、荒臺廢沼、遺跡依然、見於詩者多矣、惟錢文僖公一聯、最爲警絕云、日上故陵烟漠々、春歸空苑水潺々、裴晉公綠野堂、在午橋南、往時嘗屬張僕射齊賢家、僕射罷相歸洛、日與賓客吟宴於其間、惟鄭工部文寶一聯、最爲警絕云、水暖鳬鷺行哺子、溪深桃李卦開花、人謂不減王維杜甫也。

閩人有謝伯初者、當天聖景祐之間、以詩知名、如自種黃荅添野景、旋移高竹聽秋聲、園林換葉梅初熟、池館無人燕學飛之類、皆無愧於唐諸賢。

龍圖學士趙師民、以醇儒碩學、名重當時、詩思尤精、如麥天晨氣潤、槐夏午陰清、前世名流、皆所未到也。

退之韓筆力無施不可、而嘗以詩爲文章末事、故其詩曰、多情聽酒伴、餘事作詩人也、然其資談笑、助諧謔、叙人情、狀物態、一寓於詩、而曲盡其妙、此在雄文大手、固不足論、而予獨愛其工於用韻也、蓋得其韻寬、則波瀾橫溢、泛入傍韻、乍還乍離、出入回合、殆不可拘以常格、如此日足可惜之類、是也、得韻窄、則不復傍出、而因難見巧、愈險愈奇、如病中贈張十八之類是也、

下略

溫公詩話

司馬光字君實宋徽州人封溫國公

鄭工部詩有杜曲花香釀似酒霸陵春老於人、誠難得之句也。

林逋處士、有詩名、人稱其梅花詩、云、疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏、曲盡梅之體態。

魏野處士、陝人、字仲先、其詩効白樂天體、王大尉相且從車駕過陝、野貽詩曰、昔時宰相年々替、君在中書十一秋、西祀東封俱已了、如今好遂赤松遊、王袖其詩以呈上、累表請退、上不許、野又嘗上冠萊公準詩云、好去上天辭將相、却來平圯作神仙、又有啄木鳥詩云、千林蠹如盡、一腹餒何妨、又竹杯校詩云、吉凶終在我、反覆謾勞君、有詩人規戒之風、仲先詩有、燒葉炉中無宿火、讀書窓下有殘燈。

冠萊公詩、才思融遠、嘗爲江南春云、波渺々柳依々、孤村芳草遠、斜日杏花飛、江南春盡離腸斷、蘋滿汀洲人未歸、爲人贈炙。

陳文惠公堯佐能爲詩、世稱其吳江詩云、平波渺々烟蒼々、菰蒲纔熟楊柳黃、偏舟繫岸不忍去、秋風斜日鱸魚香、又嘗有詩云、雨網蛛絲斷、風枝鳥夢搖、詩家零落景、采石合如樵。

李長吉歌、天若有情天亦老、人以爲奇絕無對、曼卿石對月如無恨月長圓、人以爲勍敵、

詩云、群羊墳首、三星在留、言不可久、古人爲詩、貴於意在言外、使人思而得之、故言之者無罪、聞之者足以戒也、近世詩人、唯杜子美最得詩人之體、如國破山河在、春深草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、山河在、明無餘物矣、草木深、明無人矣、花鳥平時可娛之物、見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。

熙寧初、魏公^韓罷相留守北京、新進多陵慢之、魏公鬱々不得志、嘗爲詩云、花去曉叢蜂蝶亂、雨勻春圃桔槔閑、時人稱其微婉嘉祐中有劉諷都官、年六十三致仕、夫婦徙居賴山、景仁^范有詩、送之云、移家尚恐青山淺、隱几惟知白日長、有朱公綽送諷詩云、疏草焚來應見史、橐金散盡只留書、皆爲時人所傳稱、

中山詩話

劉攽字貢父宋
袁州人号中山

僧惠崇詩云、河分岡勢斷、春入燒痕青、然唐人旧句、而崇之弟子、吟贈其師詩曰、河分岡勢司空曙、春入燒痕劉長卿、不是師偷古人句、古人詩句似師兄、杜工部有峽束蒼江起岩排石樹圓、頃蘇子美遂用峽束蒼江、岩排石樹、作七言句、子美豈竊詩者、大抵諷古人詩多、則往々爲已得也

人多取佳句爲句圖、特小巧美麗可喜、皆指詠風景、影似百物者尔、不得見雄材遠思之人也、梅聖俞愛嚴維詩曰、柳塘春水慢、花塢

夕陽遲、固善矣、細較之、夕陽遲則繁花、春水慢何須柳也、工部詩云、深山催短景、喬木易高風、此可無瑕類、又曰、蕭條九州內、人少豺狼多、少人慎莫投、多虎信所過、飢有易子食、獸猶畏虞羅、若此等句、其含蓄深遠、殆不可模倣

詩以意爲主、文詞次之、或意深義高雖文詞平易自是奇作、世倣古人平易句、而不得其意義、翻成鄙野可笑、盧仝云、不即溜鈍漢、非其意義、自可掩口、寧可俚之耶、韓吏部古詩高卓、至律詩、雖稱善、要有不工者、而好韓之人、句々稱述、未可謂然也、韓云、老公真箇似童兒、没井埋盆作小池、直諧戲語耳、歐陽永叔江鄰幾論韓雪詩、以隨車翻縞帶、逐馬散銀杯爲不工、謂坳中初蓋底、凸處遂成堆爲勝、未知真得韓意否也、永叔云、知聖俞詩者莫如某、然聖俞平生所自負者、皆某所不好、聖俞所卑下者、皆某所稱賞、知心賞音之難如是、其評古人之詩、得無似之乎

唐詩廣和、有次韻先後無易有依韻同在一有用韻用彼韻不必次

管子曰、事無終始、無務多業、此言學者貴能成就也、唐人人爲詩、量力致功、精思數十年、然後名家、杜工部云、更覺良工用心苦、然豈独画手心苦耶、

汪白爲平糶詩、刺時病云、穴垣補牆隙、牆成垣已壞、斷屨補穿履、々成屨亦虧、

放翁詩話陸游字務觀宋人号放翁

西山十二真君、各有詩、多訓誡語、後人取爲籤、以占吉凶、極驗、射洪陸使君廟、以杜子美詩爲籤、亦驗、予在蜀、以淳熙戊戌春被召、臨行、遣僧則華往求籤、得遺興詩曰、昔者龐德公未曾入州府、襄陽耆旧間、処士節獨苦、豈無濟時策、終竟畏網罟、林茂鳥有歸水深魚知聚、舉宅隱鹿門刈表焉得取、予讀之惕然、顧迫貧從仕、又十有二年、負神之教多矣

洪駒父竄南島有詩云、関山不隔還鄉夢、風月猶隨過海身

吳幾先嘗言、參寥詩云、五月臨平山下路、藕花無數滿汀洲、五月非荷花盛時、不當云無數滿汀洲、廉宣仲云、此但取句美、若云六月臨平山下路、則不佳矣、幾先云、只是君記得熟、故以五月勝、不然止云六月、亦豈不佳哉、

柳子厚詩云、海上尖山似劍鉞、秋來処々割愁腸、亡兄仲高云、晋張望詩曰、愁來不可割、此割愁二字出處也、

張文潛言、王仲父詩、喜用助語、自成一體、予按韓少師持國亦喜用之、如酒成豈見甘而壞、花在須知色即空居仁由義吾之素、處順安時理則然

岑參在西安幕府、詩云、那知故園月、也到鐵關西、韋應物作郡時、亦有詩云、寧知故園月、今夕在西樓、語意悉同、而豪邁閑澹之趣、居然自異、

阮裕云非但能言人、不可得、正索解言久、亦不可得、

遼相李儼作黃菊賦、獻其主耶律弘基、々々作詩題其後、以賜之云、昨日得卿黃菊賦、碎剪金英填作句、袖中猶覺有餘香、冷落西風吹不去

茶山先生云、徐師川擬荆公細數蒼苔因坐久緩尋芳草得歸遲云、細落李蒼苔那可數、偶行芳草步因遲、初不解其意久乃得之、蓋師川專師陶淵明者也淵明之詩、皆適然寓意、而不留於物、如悠然見南山、東坡所以知其決非望南山也、今云、細數落花、緩尋芳草、留意甚矣、故易之、又之荆公多用淵明語、而意異、如柴門雖設要常關、雲向無心能出岫、要字能字、皆非淵明本意也

劉長卿詩曰、千峰共夕陽佳句也、近時僧癩可用之云、亂山爭落日雖工而窘、不及本句、

李後主落花詩云、鶯狂應有限、蝶舞已無多未幾亡國、宋子京亦有落花詩云、香隨蜂蜜盡、紅入燕泥乾、亦不久下世、詩識蓋有之紹興中、有貴人好爲俳諧體、詩及箋啓、詩云、綠樹帶雲山罨畫、斜陽入竹地銷金、啓云、長楸脫却青羅帳、綠蓋千層、俊鷹解下綠綠絲纒、青雲万里、後生遂有以爲工者、賴是時、前輩猶在、雅正未衰、不然與五代之體何異、此事繫時治忽、非細事也、夜涼疑有雨院靜似無僧此潘逍遙詩也、

劉隋州詩、海內猶多事、天涯見近臣、言天下方亂、思見天子、而不可得、々天子近臣、亦足自慰矣、見天子近臣、已足自慰、況又見之于天涯乎、其愛君憂國之意、鬱然見于言外

唐韓雄詩云、門外碧潭春洗馬、樓前紅燭夜迎人、近世晏叔原樂府詞云、門外綠楊春繫馬、床前紅燭夜呼盧、氣格乃過本句、不謂之剽可也、

上清宮壁間、有文興可題一絕、曰、天氣陰々別作寒、夕陽林下動歸鞍、忽聞人報後山雪、更上上清宮上看、

詩正義曰、絡緯鳴蟬婦驚、宋子京秋夜詩云、西風已飄上林葉、北斗直掛建章城、人間底事寂堪恨、絡緯啼時無婦驚、其妙於用事如此、

蘇黃門曰、長恨冗而凡、哀江頭簡而高、

今人解杜詩、但尋出處、不知少陵之意初不如是、蓋後人元不知杜詩所以妙絕古今者、在何處、但以一字無出處爲工、如西崑酬唱集中詩、何曾有一字無出處者、便以爲追配少陵可乎、

晁以道明皇打毬圖詩、宮殿千門白晝開、三郎沉醉打毬回、九齡已老韓休死、明日應無諫疏來、又張果洞詩云、怪底君主慙漢武、不誅方士守輪臺、皆偉論也、

唐人詩中有曰無題者、率杯酒狎邪之語、以其不可指言、故謂之無題、非真無題也、近歲呂居仁陳去非亦有曰無題者、乃与唐人不類、或真無其題、或有所避、其實失於不深考耳、

東坡在嶺海間、最喜讀陶淵明柳子厚二集謂之南遷二友

白樂天云、微月初三夜、新蟬第一聲、晏元憲云綠樹新蟬第一聲、王荊公云、去年今日青松路憶似聞蟬第一聲、三用而愈工、信詩之無窮也

唐王建牡丹詩云、可憐零落藥收取作香燒雖工而格卑、東坡用其意云、未忍汚泥沙牛酥煎落藥超然不同矣

浩然齋雅談 周密字公謹

對偶之佳者、曰、數點雨聲風約住、一枝花影月移來、柳搖臺榭東風軟、花壓欄檻春晝長、天下三分明月夜、楊州十里小紅樓、梨

園子弟白髮新、江州司馬青衫濕、數聯、皆天衣無縫、妙合自然、

孟郊云、難將寸草、心報荅春風暉、此語閎綱常、非唐詩人語也、至東坡詩云、微生真草木、無處謝天力、慈顏如春風、不見桃李實、古今抱此恨、有志俯仰失、其言尤悲、東萊于蓼莪章云、莪蒿不能報天地之生育、猶人子不能報父母之劬勞、皆祖郊之意也、

陸放翁有心大平菴詩云、天下本無事、庸人擾之耳、胸中故澹然、忿慾定誰使、又云、少年妄起功名念、豈信身閑心太平、樂天有

云、間傾三數酌、醉吟十餘聲、便是羲皇代、先從心太平、蓋出黃庭經云、觀志流神寄奇靈、間暇無事修大平、又外景經云、觀志遊神三奇靈、行間無事心太平、又樂天云、此身不欲全強健、々々多生人我心、又云、自學坐禪休服藥、從他日復病沉々、于良史云、僻居人事少、多病道心生、此存楚以爲外懼之意、

半山詩云、謀臣本自繫安危、賤妄何能作禍基、但願君王誅宰嚭、不愁宮裏有西施、李太白詩云、若使管仲身長在、宮內何妨有六人、在管仲時、桓公之心未蠹也、若已蠹、雖管仲奈何、未有心蠹、尚能用管仲之理、張文定遊華清宮云、當初不是不窮奢、民樂昇平不怨嗟、姚宋未亡妃子在胡塵那得到中華、亦此意也、

唐鎬金蓮步詩云、金陵佳麗不虛傳、浦々荷花水上仙、未曾與民同樂意、却于宮裏看金蓮、

開元中、賜邊軍纈衣、製于宮中、有兵于袍中得詩、云、沙場征戰客、寒苦若爲眠、戰袍經手作、知落阿誰邊、蓄意多添線、含情更著綿、今生已過也、重結後生緣、兵士以詩呈、々々進呈、玄宗徧示宮中曰、作者勿隱、不汝罪、有一宮人、自言万死、上深憫之、遂以嫁得詩者、謂曰、吾與汝結今生緣、邊人感泣、又載僖宗時事 今畧之

繒雲夫人宮詞云、燦錦堂西過夕陽、水風吹起芰荷香、內監催掃池邊地、準備官家納晚涼、

康輿之伯可詩云、越王山下千樹梅、逐客年々走馬來、寒玉滿枝風色裏、不受暖靄輕烟催、

絕、云、霜拂金鞍玉墜腰、鄰雞催喚紫宸朝、爭如林下飽清夢、殘月半窓松影搖、頗得予心之同、因以類得數篇、併書于此、樂天本載寄陳山人詩、今畧之詩云、重裘煖帽寬氈履、小閣低窓深地爐、身穩心安眠未起、西京朝士得知無、軟綾腰褥薄綿被、涼冷秋天穩暖身、

一覺曉眠殊有味、無因說與早朝人、又云、雞鳴一覺睡、不博早朝人、坡翁寄傲軒詩云、牀頭車馬道、殘月挂疎木、朝客紛擾時、先生睡方熟、范至能冬至晚起云、新衣兒女鬧燈前、夢裏莊周正栩栩、騎馬十年聽曉鼓、人生元有日高眠、近世翁定遠新其說云、遲明騎馬謁朱門、安得梅花入夢魂、慚愧高人眠正熟、一生知不受人恩、周端臣題東菴云、一菴自隱古城邊、不是山林不市塵、落月滿窓霜滿屋、卧聽宰相去朝天、

嚴中和號月澗、近世詩人、云、山中道人不裹巾、一片石牀生綠鱗、昨夜瓦瓶冰凍破、梅花無水自精神、又梅天雨氣入簾櫳、衣潤

頻添柏火烘、四月江南無矮樹、人家都在綠陰中、又一声杜宇三更後、向曉綠陰連碧苔、卻恨樓高春數尺、柳綿飛不上窓來、又樹影踏不碎、花香嗅卻無、寺老柳遮塔、雨多春礙船、澗水活不凍、山楓老自靈、畫扇題詩鸞背溼、銅彝煎腦鴨心香、皆佳句也、徐元杰之母能詩、云、羅幕金泥窄地垂、夜香燒盡三更時、不知簾外浴々月、上到梅花第幾枝、

林曾號梅嶼、汴河云、一千八百隋家路、兩岸青々入帝都、可惜翠華南渡後、舊時楊柳一株無、

道士褚伯秀清苦自守、天師以學修撰命之不就、作貧女吟二首、謝之曰、夜績晨炊貧自由、強教塗抹只堪羞、閉門靜看花開落、過却春風不識愁、寂寞蓬窓鎖冷雲、地爐紉補自陽春、千金莫誤朱門聘、不是穿珠插翠人、

候館牆壁所書、多有可紀者、予嘗錄數處矣、今復得池貴陽池驛壁間語、云、昨者雨今日晴前月小後月大、君欲問百年、百年如此過、孰爲辱孰爲榮、何者福何者禍、山中多白雲、莫教脚一蹉、潭州四通館梁間有云、蝸角名蠅頭利、老天術何巧、以此役斯世昨日一替死、今日一替生、暗裏換人々不悟、門前每日見人行、是皆警世之辭也、

田錫表聖太宗朝爲翰苑、多佳語、如磬韻似煙和燭裊、松声如雨入窓流、行色迎秋清似畫、別情因景化爲詩、秋色數行江上雁、殘陽一簇渡頭人、

天台趙與偁嘗夢賦落梅詩、僅記一聯云、溪月涵虚影、山雲護斷香、

小小園林矮々屋、一日房錢一貫足、官至正郎子讀書、一妻一妾常和睦、此詩張卿所作、

呂之鵬密縣人、大金宣宗頻年南伐、因作詩、撼主兵者云、縫掖無由挂鉄衣、劍花生澀馬空肥、燈前草就平南策、一夜江神涕泣歸、其自負如此、

縉雲有掘地、得碑石篆書、公子行云、少年公子出皇都、勤馬途中倒玉壺、卻問路傍耕稼者、夜來風雨損花無、

詩家謂、誠齋多失之好奇傷正氣、若梅子流酸軟齒牙、芭蕉分綠興窓紗、日長睡起無情思、間看兒童捉柳花、極有思致、誠齋亦自語人曰、工夫只在一捉字上、

太平吟云、紛々紅紫已成塵、布穀声中夏令新、夾路桑麻行不盡、始知身是太平人、此可謂善狀太平氣象、

盱人王勝之詩云、蛙鼓鳴時月滿川、斷螢飛處草迷煙、敲門欲向田家宿、猶有青燈人未眠、殊有思致、

近北客有題襄漢詩云、襄漢雲屯十萬兵、習池酩酊不曾醒、紛紛誤晉皆渠輩、不特王家一寧馨、放翁理詩云、万物元須一理通、長生極治本同功、廣成千載無他術、祇在唐虞二典中、

(國學院大學図書館主幹)